

特集：次期学習指導要領における諸課題
「主体的・対話的で深い学び」を目指す道德教育の研究
～「特別の教科 道德」の評価を意識した実践～

清水 香保里

(文教大学教育研究所客員研究員)

Research on Moral Education Aimed at 'Proactive, Interactive and Deep Learning':
Practice based on Awareness of Evaluation of 'Moral Education as Special Subject'

SHIMIZU KAORI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

新学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、一人一人が自分事と捉え向き合うことが大切である。そこで、「考え、議論する」道德の授業改善や一人一人を見取ることができる評価が求められる。川越市の道德の委嘱研究を終えた今、「特別の教科 道德」の教科化を来年に控え、研究の課題となった指導方法や評価についての実践研究である。

1 はじめに

道德は、平成30年度から教科になる。本校では、様々な児童の心を育てていくために、平成27、28年度川越市の委嘱を受け学校研究として道德教育を行い、平成29年1月24日に川越市委嘱研究発表会を行った。

学校研究を終え、成果として、年間指導計画の見直しや月ごとのテーマを決めて学校全体で道德を取り組めたこと、話合いの仕方や表現活動が深められたことで児童の考えを引き出すことができてきたこと。教師が話合いの仕方を示範し、児童が話合いの進め方を理解できてきたこと。児童が聞き合うことや質問することで自分の考えがもてるようになってきたことなどが身に付いてきた。

課題として、指導方法や評価についての研究を深めていくことと、道德の時間を一層充実し、実生活を意識し結びつけながら道徳性を高めることが残った。

2 研究の目的

来年度は、道德が「特別の教科 道德」（以下、道德科）として教科になる。道德教育のねらいは、児童が様々な出来事に直面し、そこで起こりうる様々な問題に対して自分の考えをもち、周りの人々や環境を考えながら自分なりの生き方を考えることができる児童を育成することである。

そこで本研究では、平成27、28年度川越市委嘱研究を踏まえ、児童が自分と向き合って自己の生き方を考えることができるような、主体的・対話的で深い学びを目指す道德科の授業実践を提案することである。

そのために、道德科の評価法を模索することと、実生活に結びついた道德科を目指すこととする。

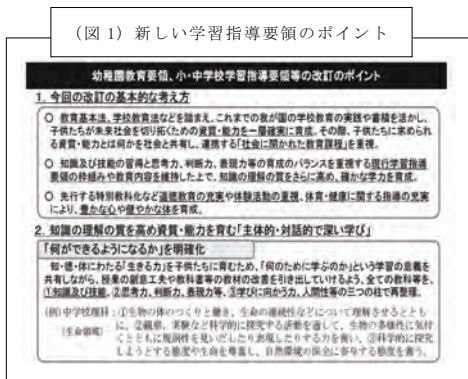
3 「特別の教科 道德」を実践していくために大切なこと

平成29年3月に文科省から出された次期学

習指導要領の改訂のポイントの柱の一つに、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が示された。「主体的・対話的で深い学び」とは、いわゆる「アクティブ・ラーニング」のことである。

ここ最近、よく耳にするアクティブ・ラーニングは、そもそも大学教育の学習成果として求められていたもので、平成24年の中教審の質的転換答申の中で、述べられた学習方法である。つまり、「アクティブ・ラーニング」とは、知識伝達型の受動的な学習に対して、能動的な学習の方法のことで、書く・話す・発表するなどの様々な活動を行うことによって認知されるものを外に出すこと、自分の言葉に置き換えて出すことである。(注1)

しかし、平成29年3月に公示された新学習指導要領の中には、「アクティブ・ラーニング」の文字はなくなり、「主体的・対話的で深い学び」に置き換えられた。



(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していき、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理し、「何ができるようになるか」を明確にした。(注2)

道徳教育においては、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」を実現することが、「主体的・対話的で深い学び」を実現することになると考えられる。(注3)

① 「主体的な学び」の視点

児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫することが求められる。(注4)

つまり、主体的な学びは、児童生徒が問題意識をもって、自分事として道徳的価値を考えることができるようにすることである。

そのためには、まず、主体的に学び合える環境を整えること、意欲を刺激する学習教材に出会えること、そして、それを吟味できる教師の力量があることなどが必要となってくる。

特に、「環境を整えること」とは、信頼できる仲間と安心して本音で話し合うことができる学級を整えることである。これは最も大切な基本的なことと考える。

本校では今年度、児童の実態把握のためにアセスを取り入れて、学級集団を客観的に診断し、よき学級経営に努めている。(詳細は(3) 児童の実態把握 アセス)

「意欲を刺激する学習教材」を常に用意することは難しい。しかしながら、学校行事や学年行事等に関連させて年間指導計画を立てていくことはできる。つまり、行事や活動などの導入として、道徳の時間を行うことができる。それ故、年間指導計画に各教科に関連させながら作成していくことに意義がある。

「吟味できる教師の力量」は、「考え、議論する道徳」を行っていくために、高めていかなければならない。児童の実態や教材に応じて、様々な展開の工夫を考えたり、組み合わせたりして行っていくことが大切である。

②「対話的な学び」の視点

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。(注5)

先述の通り、信頼できる仲間と安心して本音で話し合うことができる学級を整えることが、対話的な学びを深めていく土台となる。

具体的には、道徳の時間だけではなく各教科や特別活動、朝の会・帰りの会などで、日常的に何でも言い合え、認め合える学級の雰囲気づくりが大切になっていく。また、自分と異なった考えを受け止めることや、先哲の考え方を理解することも大切である。

児童同士で話し合う問題解決的な学習を行うに当たっては、自分のこととして捉え、多面的・多角的に考えることにより、将来、道徳的な選択や判断が求められる時に、自分にも他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質や能力を育てていくことが必要である。(注6)

「対話的な学び」を進めていくには、どのようなことも、自分事として捉え、考えていく必要があると考える。そのように進めていくためには、「あなただったら、どうしますか。」や、「自分が〇〇だったら、どうしますか。」のような発問を行いながら、「対話的な学び」を刺激していく。

③「深い学び」の視点

道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選

択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とすることが求められる。

そのためには、道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探求する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫することが考えられる。(注7)

指導方法の工夫として示されたのが、平成28年7月に出された「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告」である。「道徳科における質の高い多様な指導方法について(イメージ)」によると、①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習、②問題解決的な学習、③道徳的行為に関する体験的な学習の3つが例示された。これらは、一例であることと、3つを組み合わせる指導を行うことも考えられている。

このような、「主体的・対話的で深い学び」を実現させていくために、進んで授業改善を行っていく必要がある。

(2) 道徳科の評価

教科化になるということは、評価をすることである。一教師としても不安であり、今、関心があることは、道徳科の評価についてである。

①道徳科における評価の意義

(「第3章 特別の教科 道徳の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の4)

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

数値による評価はしないが、評価はするということが学習指導要領解説で示された。

「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し学習したことの意義や評価を実感できるようにすること。」として、良い点を評価することを示した。

「道徳教育における評価については、教師が児童一人一人の人間的な成長を見守り、児童自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価する」とした。

道徳科については、「授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切である」とした。つまり、指導と評価の一体化を示した。

②道徳科の評価の在り方

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告（平成28年7月）によると、次の6点を原則とした。

- ①資質能力の3つの柱に「どのように社会・世界との関わり～」に深く関わるもの。
- ②人格そのものに働きかける道徳科において、観点別評価は妥当ではない。
- ③学習活動全体を通して見取ること。
- ④個々の内容項目ごとの評価ではないこと。
- ⑤認め、励ます個人内評価の記述式。
- ⑥学習の多面的・多角的な広がりや深まりを見取る。

つまり、内容項目ごとの評価ではなく、見える部分を全体に評価すること、子どもを認め励ますメッセージにというものである。

そして、平成29年6月に改訂された「小学校学習指導要領解説 特別の評価 道徳編」で、専門家会議を受けて、次の5点を示した。

- ①道徳科に関する評価の基本的な考え方
- ②個人内評価として見取り、記述により表現することの基本的な考え方
- ③評価のための具体的な工夫
- ④組織的、計画的な評価の推進
- ⑤発達障害等のある児童や海外から帰国した児童、日本語習得に困難のある児童等に対する配慮

①道徳科に関する評価の基本的な考え方には、学習活動全体を通して見取ることを求めることや、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握することの必要性を説いている。

また、一面的な見方から多面的・多角的な見方へ発展しているか、道徳的価値理解を自分自身との関わりで深めているかということを重視した。

③評価のための具体的な工夫は、例示として、次の6点を示した。

- ・学習の過程や成果などの記録をファイルに蓄積したもの
- ・児童自身のエピソードを累積したもの
- ・作文
- ・レポート
- ・スピーチ
- ・プレゼンテーション

これらのことから、普段の授業において考えたことを書き溜めるためのファイルやノートの必要性が伺える。

このように、評価の方法は様々である。(図2)で示したものは、高崎健康福祉大学特任教授の高岡栄氏がまとめたものである。それぞれの特徴が端的にまとめられている。活用しやすく、授業後に見てじっくり評価できる方法は、道徳ノート、ワークシート、作文の方法やポートフォリオの方法になる。しかし、高岡氏が指摘する通り、記述に苦手意識をもっている児童には配慮が必要である。書くことに抵抗を感じている児童であっても、口に出して発表することに長けている児童はいる。そこで、忙しい授業中ではあるが、児童のつぶやきや発表したことを、板書の中に児童のネームプレートを置いて記録する方法もある。そして、授業後に板書を写真に撮れば、記録として残ることができる。

(図2)「評価の様々な方法」(ただし、板書は筆者による)(注8)

評価方法	評価の仕方	特徴
観察	日常の学校生活や道徳科の授業中に評価したい観点を定め、言動や表情等を観察して記録する方法。	教師の先入観や観察の際の評価基準が曖昧であると、信頼性に欠ける。複数の教師による見取りがあると、より信頼性が高くなる。
面接	児童と直接面接することで感じたことや考えたことを聞き取る方法。	一人一人の内面を見取るには有効だが、ここに面接するので時間がかかる。学期や年間の予定を組んでクラス全員と行う方法もある。
質問紙	事前に調査したい事柄に関する質問事項を準備しておき調査する方法。	全体的な傾向を把握するには有効だが、一人一人の心の機微を理解し見取るには工夫が必要。
道徳ノート ワークシート 作文	道徳ノート等に記述された文字から評価する方法。	内面的な意識を理解しやすいが、記述に苦手意識をもっている児童には配慮が必要。記述文を評価するための観点的設定が必要。
パフォーマンス	授業で学んだことを図やイラスト、身体表現・演技、スピーチ、記述などで表現し、その作品(パフォーマンス)を基に評価する方法。	ルーブリック(評価基準)を作成し、それを基に評価する。評価基準は各自が考案する。
ポートフォリオ	道徳ノート、ワークシート、作文、役割演技等を収録した映像、プレゼン等の学習成果物を確認することなどを通して、学習したことを再確認し、自尊感情や自己効力感を高めることを意図した方法。	学期末や学年末に読み返したり見返したりすることにより、道徳的な成長を確認していく。児童が自己評価する方法も有効。
エピソード	発言や記述したものをエピソード(挿話)の形で蓄積していく方法。	短期エピソード(授業中の発言や記述を蓄積)と長期エピソード(学校生活の中の言動や記述文を蓄積)がある。
板書	発言やつぶやきを黒板に記録していく方法。ネームプレートを置くことで、発言者を明確化できる。	発言したことが形になるので、記述することに苦手意識をもっている児童には最適。一部の児童のみの評価になるので補助的なもの。

(3) 児童の実態把握 ―アセス―

「考え、議論する道徳」の授業が成立するためには、学校づくりと学級経営の視点が基盤となる必要がある。なぜなら、児童生徒にとって、まずは自分の発言を教師や仲間が受け止めてくれるという信頼と安心感がなければ、「考え、議論する道徳」の授業は成立しないからである。(注9) つまり、学級経営がうまく成立していなければ、児童が本音を語り合うことはできない。言い換えれば、教師が児童一人一人の性格、環境、対人関係、学力などの実態を理解して学級を運営することができれば、「考え、議論する道徳」の土台が成立している状態にあると言える。

そこで本校では、学級集団アセスメントとして、学校環境適応感尺度「アセス」(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)を全学級実施することとした。(注10)

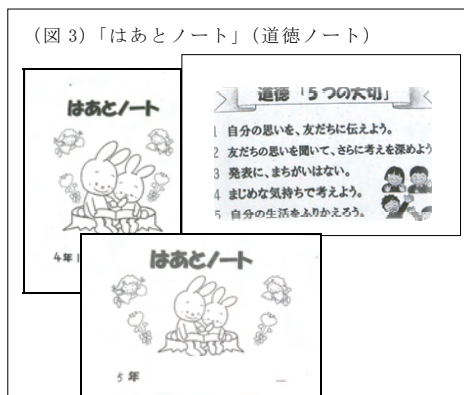
学校環境適応感尺度「アセス」とは、広島大学で開発されたもので、34項目からなる質問紙に6つの側面から学校適応感を捉えたものである。6つの側面とは、①生活満足感、②教師サポート、③友人サポート、④向社会的スキル、⑤非侵害的關係、⑥学習的適応で、その内、①生活満足感は、学校での適応感と学校以外での適応感の両方を反映した全体的な適応感を捉えたものである。

4 評価方法を意識した実践

様々な評価方法の中で、週に一度の道徳の授業を行っていく教師としては、毎時間児童に書かせて、授業後に見ることが最も分かりやすく手軽である。

そこで本校では、ワークシートを使って評価している。基本的には、表に本時に関する事柄を、裏に自己評価を書いている。それを、「はあとノート」と名付けた道徳ノートに貼っている。道徳ノートと言っても、画用紙に表紙と道徳開きの際に話した「5つの大切」

を印刷した程度のもので、それに、ワークシートを貼りつけている。



(図3)「はあとノート」(道徳ノート)

(1) 裏「価値に対する自己評価」

道徳科が目指すものは、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。そのために、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める学習を通して児童を育て、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることにある。

これは、「特別の教科 道徳」の目標である。

この目標の要点を評価項目として生かすことにした。つまり、「価値理解」、「多面的・多角的思考」、「自己課題」の3項目を評価項目として取り立てた。

具体的に、授業の中での最後の自己評価の中で、この3項目を使って評価した。

①価値理解(道徳的価値について考える)

ここでは内容項目について考えることができたかどうかを尋ねた。

「今日の学習で()について、考えることができましたか。」

(例)今日の学習で生活習慣の大切さについて考えられましたか。

②多面的・多角的思考(人との関わりについて考える)

ここでは、話し合いを小グループや全体で行

うことを踏まえて取り入れた。

「友達の考えを聞いて、色々な考えができましたか。様々な考えができましたか。考えが深まりましたか。考えが広がりましたか。」

3段階の評価項目に○をつける他に、友達の名前と考えのよさを欄外に書いてもいいことにした。授業によって発表することにした。その際、名前を出すことによって友達の良さを認めたり、広めたりすることができた。また、名前を出された児童は、自分の考えに自信をもつことができた。

③自己課題（自分との関わりについて考える）

ここでは、自分との関わりについて考えることができたかどうかを聞いた。また、時には、短い言葉で考えを書かせることもした。

「今日の学習を通して、これからの自分の生活について考えることができましたか。」

（例）今日の学習を通して、自分の生活習慣を振り返ることができましたか。

（例）今日の学習を通して、自分の生活習慣で見直したいことを書きましょう。

これらの3つを児童が自己評価することで、本時の学習を、児童が自分なりにどう捉えたのか再確認することや、教師が児童の考えを引き出すことができたかどうか教師自身の指導力を見ることもできた。

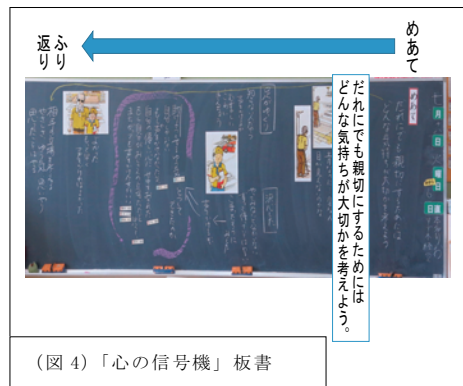
（2）表「授業に関する評価」

道徳科による本校の評価は、まだ具体的には決まっていない。しかし、今まで続けてきたワークシートを使って、児童の考えを取り溜めていくことによって、児童の内面的成長を少しでも評価することができると考えた。

①めあてを作る。

主体的に学ぶためには、「何を学ぶのか」がはっきりする必要がある。そこで、めあてを作り、学ぶことをはっきりとさせた。道徳

が苦手な教師も、めあてがあることによって、ぶれずに授業が進められると考えた。



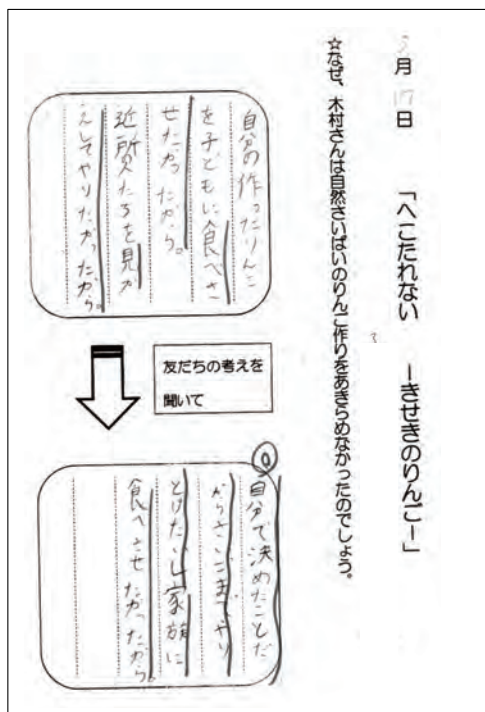
（図4）「心の信号機」板書

②変容が見えるワークシートを作る。

対話的で深い学びをするには、話し合いは欠かせない。そこで、1人で考え、3、4人の少人数で話し合い、全体で話し合いもう一度1人で考える流れを作った。話し合いを繰り返す中で自分の考えを整理することができた。また、自分の考えが浮かばなかった児童は、共感できる考えに触れることができる。そして、話し合う前と後で、自分の考えが変わったことを自覚することができた。

「へこたれない 奇跡のりんご」の教材では、「なぜ、木村さんは自然栽培のりんご作りをあきらめなかったのでしょうか。」の問いに対して、始めは「りんごを子どもに食べさせたかった。」と考えたのだが、話し合った後は「自分で決めたことだから、最後までやりとげたい」と考えを加えた。このように、上下2段のワークシートを活用することにより、考えが深まり、「努力と強い意志」の価値に近づくことができた。

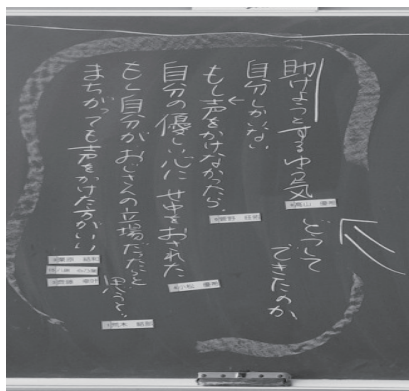
(図5) ワークシート (表)



③板書の考えに名札を置く。

全体で話し合う時に、出てきた考えを板書に書いた後、発表した児童の名札をその考えの側に置く。そうすることで、その考えにつなげて発表したい児童が、「〇〇さんの考えに付け足しで～」や「〇〇さんの言う△についてぼくは～」と、話し合いがし易くなることや、名札を貼られた児童は自信をもつことができ、発表者が増えることもある。

(図6) ネームプレート貼った板書



(3) ワークシートを活用した道徳の授業

事例 「一輪の花」(埼玉県教育委員会 『みんななかよし(彩の国の道徳)』)
 主題名 誰に対しても差別なく
 内容項目 [C 公正、公平、社会主義]
 [関連 B 親切、思いやり]
 研修会 平成29年6月9日(金)
 第4学年1組(33名)
 授業者 清水香保里(筆者)

(図7) 授業の様子



(あらすじ)

渋沢栄一が十歳の頃の実話を基にした教材である。近所に伝染病にかかると噂された重病の娘「りん」に、誰も尋ねることはなかったが、栄一の母「えい」だけは、優しく接していた。栄一は「りん」に近づくこともできない。娘からもらったぼたもちをおいしそうに食べた母が、「わたしが食べることによって、あの子はどんなに喜ぶでしょう。」と語る。栄一は、その言葉が頭から離れず考えるという話。

この教材の価値項目は「親切、思いやり」であるが、娘「りん」に対する世間の偏見に、主人公が流されてしまう内容であることから、「公正、公平」の価値項目を中心として捉えていった。

本学級の児童の実態を受け、主に次の場面を中心に話し合った。

①重病で一人暮らしの娘「りん」の家へ、母と一緒に栄一が訪ねる場面。

娘の側まで近寄れない栄一の気持ちを考えさせる。ここでは、世間の偏見に栄一が同調して流されてしまう気持ち、「りん」を差別してしまう気持ちに共感させた。

②娘が持ってきたぼたもちをおいしそうに食べた母が、「私が食べることによって、あの子はどんなに喜ぶでしょう。」と話した後の場面。

母の言葉が頭から離れない栄一の心の中を考えさせる。噂に流されて差別してしまう気持ちと噂に流されず誰に対しても公平に接しようとする気持ちの二部に児童の考えをまとめた。

ここで、ワークシートの記入をし、今の自分の考えを書いた。また、心情円盤を使って、栄一の気持ちの分配を表現し、それらの度合いを話し合った。

そして、「あなたが栄一だったらどうですか。」や、「なぜお母さんは、りんさんに優しくできたのでしょうか。」と、発問することにより、噂に流されてしまう弱い心を認めると共に、誰に対しても公平に接する必要があることに気付けるようにした。その後、もう一度ワークシートを記入した。最後に、2回ワークシートに記入した自分の考えを基に、めあてに対して考えたことをまとめた。

このように、自分の考えをワークシートに2度書くことによって、自己の心の変容を見取ることができる。資料2は、児童一人一人のワークシートの内容をまとめたものである。これを見ると、始めからプラス（噂に流されてはいけない）一色で変わらない児童が4名、プラスに変容している児童が25名、マイナスへ変容している児童が2名である。

また、深い学びに近づけるために、発問も自分事となるような発問へと工夫する必要がある。

ある。

(図8) 「一輪の花」ワークシート



5 おわりに

道徳は、平成30年に教科化を迎える。現在は移行期間中である。教科書が用いられることで、今後各学校で年間指導計画の作成が行われるなどの準備に追われるであろう。

これからの道徳は、様々な方法で児童の気持ちを洗い出し、考える力を高め、よりよい生活のための生かしていく必要がある。

今までのように時系列で主人公の気持ちを

問うばかりではなく、主人公の周りの立場を意識したり、自分が主人公だったらと考えたりすることや、自分事として問いかけたり、他者と話し合うことを通して自分なりの答えを見つけ出したりすることが求められている。

そこで、「主体的・対話的で深い学び」をめざす道徳教育の実践の一つとして、ワークシートを使って、評価を意識した考える道徳を提案した。一人で考え、グループで考え、全員で考え、そしてまた一人で考えるというサイクルで、今までより深く考えられるようになった感覚はあった。また、記録を基に、児童の考えとその変容を見取ることができ、評価に生かすことができた。

しかしながら、書くことに抵抗がある児童は、ワークシートの中に自分の思いを十分に表現することは難しいので、ワークシートとともに児童の考えを教師が引き出して整理した板書を活用していくことがよいと考えた。今後は、児童の考えを盛り込んだ構造的な板書が求められていくことになるであろう。

道徳が、教科化になることを一つのチャンスとして授業の方法を検討し、道徳の時間を一層充実させ実生活と結びつけながら、学校全体で児童の道徳性を高めていきたい。

<注釈>

- 1) 清水香保里（拙著）、「自ら問題意識をもち、生き方を考える道徳教育の創造 ―アクティブ・ラーニングを意識した学校研究―」『文教大学教育研究所紀要』第25号、2016、
- 2) 文部科学省、「新しい学習指導要領のポイント、平成29年3月
- 3)～7) 教育課程部会、「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」、平成28年8月26日、pp.298-300
- 8) 富岡栄『道徳教育』（No.709）、2017、pp.9-10

板書のみ筆者による。

- 9) 貝塚茂樹『埼玉教育』（第2号）、2017、pp.2-3
- 10) 栗原慎二・井上弥編著『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版、2010年
※2007年に児童生徒用学校適応感尺度を作成。

<主要参考文献>

- ・文部科学省『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』、平成29年6月
- ・文部科学省 教育課程部会、「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」、平成28年8月26日

資料 1

第 4 学年 1 組 道徳学習指導案

平成 29 年 6 月 9 日 (金) 第 6 校時
授業者 教諭 清水 香保里

1 主題名 誰に対しても差別なく 内容項目 [C 公正、公平、社会主義]
[関連 B 親切、思いやり]

2 ねらい 誰に対しても分け隔てをしないで、公正、公平な態度で接しようとする心を育てる。
教材名 「一輪の花」 (出典：埼玉県教育委員会『みんななかよし (彩の国の道徳)』)

3 主題設定の理由

(1) ねらいや指導内容について

小学校 3 年生及び 4 年生の指導の観点は、「誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接すること」である。

この段階における児童は、誰に対しても分け隔てをしないで接することの大切さを理解できるようになる。しかし、場合によっては自分の仲間を優先し、自分の好みで相手に対して不公平な態度で接してしまうことも少なくない。

指導に当たっては、不公平な態度が周囲に与える影響を考えさせるとともに、そのことが人間関係や集団生活に支障を来し、いじめなどにつながることを理解させることが大切である。

(2) これまでの学習状況及び児童の実態について

本学級の児童は、明るく素直で元気がよく優しい児童が多い。帰りの会で友達の頑張りを発表するだけではなく、授業の中で友達の頑張りが見えた時は、自然と拍手が沸き温かい雰囲気にも包まれることもしばしばある。また、運動会の「台風の目」では、棒を上手く運べるように友達に働きかけ、協力し合うこともできていた。

しかし、生活班など小グループでの活動は、自分の要求を優先し、不公平な振る舞いをしてしまいトラブルになることがある。

学級会で話し合っって作った 4 年 1 組のスローガン「みんななかよし 4・1 元気パワーで一致団結」をめざし、様々な行事や各教科・領域の学習や生活を通して、誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接することができる心を育てていきたい。

(3) 教材の特質や活用方法について

洪沢栄一が十歳の頃の実話を基にした教材である。近所に伝染病にかかったと噂された重病の娘「りん」に、誰も尋ねることはなかったが、栄一の母「えい」だけは、優しく接していた。栄一は「りん」に近づくこともできない。娘からもらったぼたもちをおいそうに食べた母が、「わたしが食べることによって、あの子はどんなに喜ぶでしょう。」と語る。栄一は、その言葉が頭から離れなかった。

この教材の価値項目は「親切、思いやり」であるが、娘「りん」に対する世間の偏見に、主人公が流されてしまう内容であることから、「公正、公平」の価値項目を中心として捉えていく。

本学級の児童の実態を受け、主に次の場面を中心に話し合うことにする。

①重病で一人暮らしの娘「りん」の家へ、母と一緒に栄一が訪ねる場面。

娘の側まで近寄れない栄一の気持ちを考えさせる。

②娘が持ってきたぼたもちをおいそうに食べた母が、「私が食べることによって、あの子はどんなに喜ぶでしょう。」と話した後の場面。

母の言葉が頭から離れない栄一の心の中を考えさせる。

③一輪の花をたむける母の姿をそっと見つめている場面。

母の姿を見て、栄一が母から学んだことを考えさせる。

4 学習指導過程

段階	学習活動・主な発問	予想される児童の反応	・指導上の留意点 ☆評価	時間
導入	1 仲間外れや友達によって差をつけてしまった経験があるかを尋ねる。	<ul style="list-style-type: none"> 給食の配膳の量 掃除の分担 遠足のお弁当グループ 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間外れや差別をしてしまった場面を想起し、ねらいとする道徳的価値について問題意識がもてるようにする。 	3
	(めあて) 仲間外れやさべつをしないためには、どんな考え方が必要だろうか。			
とらえる	2 教材について知る。 ・教材の登場人物、条件・状況を知る。	<p>[登場人物] (主人公) 栄一 (相手方) 母えい、娘りん</p> <p>[条件・状況] 栄一が10歳頃、近所にうつる病気と言われ長く患っている娘「りん」の家に、栄一の母「えい」は栄一を連れていつも訪ねていた。</p>		5
展開	<p>・教材の読み聞かせを聞く。</p> <p>3 教材を読んで話し合う。</p> <p>(1) 娘の側まで近寄れない栄一は、どんなことを考えているでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 病気がうつったらどうしよう。 行きたくないなあ。 お母さんはなぜいつもりんさんの家へ行くのだろう。 一人暮らして病気なんて可愛そうだ。 うわさは本当かな。 うつらなければ近寄れるのに。 	<ul style="list-style-type: none"> 娘の重い病気はうつると噂されているので、娘の家へ行きたくない気持ちを共感できるようにすると共に、噂に流されている栄一の心の弱さも気付けるようにする。 	28
深める	(2) 部屋に戻った栄一は、母の言葉が頭から離れず、どんなことを考えているでしょう。	<p>(うわさに流される)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本当に病気はうつらないのだろうか。 信じられない。 お母さんにうつってないだろうか。 ぼたもちに病気が入っているかもしれない。 <p>(うわさに流されない)</p> <ul style="list-style-type: none"> りんさんを助けたい。 お医者様がうつらないと言っているのだから大丈夫だろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 噂に流されて差別してしまう気持ちと噂に流されず誰に対しても公平に接しようとする気持ちの2分法に児童の考えをまとめる。 心情円盤を使って、栄一の気持ちの分配を表現し、話し合いを行う。 	

		<p>★あなたが栄一だったらどうですか。</p> <p>★なぜお母さんは、りんさんに優しくできたのでしょうか。</p> <p>(3) 栄一は、一輪の花をたむける母の姿を見て、どんなことを学んだのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人によって差別してはいけない。 ・りんさんに近寄れない。 ・りんさんに近寄れる。 ・うわさに流されない勇気があるから。 ・思いやりの心があるから。 ・りんさんの悲しさが分かったから。 ・誰に対しても平等に優しくすることが大切。 ・噂に流されない気持ち。 ・仲間外れにしないこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・(2)の発問の複線として、★の発問に触れ、噂に流されてしまう弱い心を認めると共に、誰に対しても公平に接する必要があることに気付けるようにする。 ・誰に対しても、「公正、公平」な態度で接することには、「思いやり、親切」な気持ちがあることにも気づけるようにする。 <p>☆相手に対して、偏った見方をせず、公正、公平な態度で接することと、その根底には、人を思いやる気持ちがあることについて、考えを深めることができたか。</p> <p>(観察、発表)</p>	
	見つける	<p>4 今までの自分を振り返り、よりよい生き方を考える。</p> <p>・今日の学習を通して今までの自分を振り返り、めあてに対して考えたことを書きましよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・その人のことを誰かが悪く言ったとしても、流されなくて、みんな同じように接することが大切。 ・誰に対しても、平等に接することが大事。 ・ひとりぼっちがいたら、話しかけたり、誘ったりする。 ・仲間外れや差別をしている人を見つけたら、やめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書く活動を取り入れ、自分自身をじっくりと見つめさせることによって、ねらいとする道徳的価値についての自覚を深められるようにする。 <p>☆これからの生活で、仲間外れやさべつをしないために、誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接しようとするのが自分なりの言葉で書くことができたか。(ワークシート、発表)</p>	7
終末	あたためる	<p>5 教師の話を聞く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・視線を合わせて、じっくりと話が聞ける雰囲気作りをする。 ・『心のノート 5,6年』P84～85の「どうしてゆがめてしまうのか?」の写真と学級の全体写真を見せながら本文を読み、「公正、公平」に接していこうとする意欲の向上を図る。 	2

5 他の教育活動との関連

- ・係や当番の活動の中で、公平に仕事を分担できるようにする。
- ・話合いの学習では、友達の話最後まで公平に聞くことができるようにする。
- ・帰りの会の中で、友達の頑張りを発表し、友達の素晴らしさを共感できるようにする。

6 評価の観点

<児童の学習状況の評価>


- ・誰に対しても分け隔てをしないで、公正、公平な態度で接することの大切さを理解することができたか。

<児童の道徳性に係る成長の様子の評価>

- ・誰に対しても分け隔てをしないで、公正、公平な態度で接しようとする意欲が高まったか。


7 板書計画

母から
学んだこと



お医者様は「うつりません。」とおっしゃったわよ。それに、わたしが食べることで、あの子はどんなに喜ぶでしょう。


母えい 栄一




めあて
なかまはずれや差べつをしないためには、どんな考えが必要だろうか。

一輪の花

うわさに流される



うわさに流される



だれにでも優しくすること。
ひとりぼっちがいたら話しかける。
なかまはずれをしている人がいたら注意する。

・本当につらないのか。
・しんじられない。
・なぜお母さんだけが行くの
　　だろう。
・りんさんを助けたい。
・お医者様がうつらないと言
　　っているから大丈夫。
・人によって差をつけては
　　けない。


・病気がうつたらどうしよう。
・行きたくないな。
・一人ぐらして病気なんてかわいそうだな。

・栄一が十才のころ
・近所に一人ぐらしのむすめ「りん」
・重い病気で人にうつるとうわさ
・だれも近寄らず、母えいだけがたずねる。


めあて
なかまはずれや差べつをしないためには、どんな考えが必要だろうか。

一輪の花

うわさに流される



うわさに流される



だれにでも優しくすること。
ひとりぼっちがいたら話しかける。
なかまはずれをしている人がいたら注意する。

・本当につらないのか。
・しんじられない。
・なぜお母さんだけが行くの
　　だろう。
・りんさんを助けたい。
・お医者様がうつらないと言
　　っているから大丈夫。
・人によって差をつけては
　　けない。

・病気がうつたらどうしよう。
・行きたくないな。
・一人ぐらして病気なんてかわいそうだな。

・栄一が十才のころ
・近所に一人ぐらしのむすめ「りん」
・重い病気で人にうつるとうわさ
・だれも近寄らず、母えいだけがたずねる。

- 56 -

資料2

部屋に戻った栄一は、母の言葉が頭から離れず、どんなことを考えているでしょう。	一輪の花(6,9)		心の信号機(7,18)	
	前	後	前	後
1	うわさがかわいという気持ちで少し助けた。 (+全赤)	りんさんがかわいそうでしょうがない。 (+全赤)	やっぱ親切にしたらほうがいい。	自分が思ったことは全ていい。
2	お母さんがなにかよくしているからほくもなから、助けてあげたい。(ほほ赤)	お母さんがうつらないならほくもうつらないから、助けてあげたい。(+全赤)	優しい気持ち、勇気。	みんなの気持ちを思う。人の事を考える。
3	うつたらかわいけど、うわさがうそなら、なにかよしたい。(1/2赤)	りんさんと、一番のなかよしになってあげたかった。お母さんがうつらないならなにかから大丈夫だったの。(+ほほ全赤)	困っている人、助けようとする気持ち。	知らない人でも困っていたら助ける。
4	お母さんがうわさを消してくれる。(3/4青)	だれかがうわさをなくそうとしてくれるから。誰も変わらなかった。少し差別はいけないけど。(3/4青)	人は、優しくなくても親切にすればいい。	勇気を出すこと。
5	相手が書かれていやなことは、自分もいやだから助けて。(ほほ赤)	お医者さんが書いてたし、悲しんでいるから。(+全赤)	だれでも声をかける。	だれでも声をかける。
6	うつるといいうわさをなくしたいけど。(3/4青)	りんさんの病気が悪くなる前に助けてあげればよかった。できることは助ける。(+全赤)	じっくり考えて、もしいたら声をかける。	困っている人がいたら、もし大丈夫だったたら声をかける。
7	うわさをなくせば、みんななかよくしてくれる。(全赤)	助けたりしなきゃ何もしない。(全赤)	あきらめない気持ちが必要。	
8	ちよつとかわいけど、それでも自分にやれることがあるなら役に立ちたい。(3/4赤)	言葉のお蔭かたいに助けられることを作る。うわさなんて信じない。(+全赤)	優しく接する気持ち、勇気。	優しく接すること。
9	うわさがなおれば、みんながお見舞いに来てもらえる。(3/4赤)	うわさがなおれば、みんなと同じ普段の生活ができる。(+ほほ全赤)	助ける。もし、ひかれちゃったら死んじゃうかもいれないから。	優しく接すること。
10	うわさがかわい。消すことができる。みんなまで協力して置きたい。(ほほ赤)	うわさはちよつとかわくったけど、助けて。(+ちよつと青増える)	人を助けてあげたい気持ちがあれば、これからも役立つ。	優しくする。
11	うわさを消して、りんさんが友達を作れるようにしたい。	うわさを消して、りんさんが友達を作れるようにしたい。	優しい気持ち。	誰にでも助ける勇気。
12	うわさがなおたらみんなが仲良くなる。うわさを消したらみんなと同じようになる。(2/3赤)	うわさをされることわいし、その場で特別にされたらいいやだから。(2/3青)	欠席	欠席
13	病気がうつる。うわさを消したいけどかわい。(2/3青)	なかよくしよう。(全赤)	優しい気持ち。	優しく言う。
14	治つてほしいけど病気がうつるから行きたくない。(5/6青)	心配して近づく。(5/6赤)	一生けん命声をかける。	知らない人にも話しかける。
15	うわさをせつたいに消す。だけど、ちよつとかわいいなあ。(2/3赤)	ためなおそれていいやだめだ。人のためになにかうわさがうそって伝えたい。(全赤)	助けたいという勇気。	知らない人でも話しかけられる。
16	うわさを消したいけど、うわさがかわい。(2/3青)		欠席	欠席
17	欠席	欠席	だれもこなかつたらいいやだから、でも死んじゃつたらいいや。	人を助けること。

18	うわさを消さないで、りんさんがかわいそうだし心配。うわさをこわかっていたら何も役にならない。(全赤)	→	差別はいけない。どんな人でも助け合い、足りない所は補いあげばいい。	相手が困っている時はお互い様持たから、自分だったらどうしようと考えようとする。勇気が大切。	相手の立場を考える。
19	役に立ちたいけど、うわさはこわい。(1/2赤)	→	りんさんが、差別されていてかわいそう。役に立ちたい。(全赤)	相手が困っている時はお互い様持たから、自分だったらどうしようと考えようとする。勇気が大切。	優しい気持ちで取り組む。
20	りんさんが一人でかわいそうだけど、少しだけ勇気がこわい。(2/3赤)	→	りんさんが自分だったらすごいやだし、りんさんが自分を助けてあげたい。(全赤)	優しい気持ちと思いやりの気持ち。誰でもどこがおかしいなと思ったら、優しく言葉をかけてあげた方がいい。	誰にでも勇気を出して声をかけられる。
21	うつののはこわいけど、仲良くもした。(1/2赤)	→	重い病氣にかかっているりんさんがかわいそうだし、差別されているのもかわいそうだから。(全赤)	優しい気持ち。誰にでも勇気を出して声をかけられる。	知らない人でも声をかけられる。
22	病氣がうつるといううわさがなくなれば、みんなと仲良くなれると思うから。(5/6赤)	→	最後の方で、友達を構うてはいいけないと思つた。	相手の立場を考えようと思つた。	
23	(うわさを)消さなきゃ、りんさんがずっと一人ぼっちだから。(2/3赤)	→	人に優しくすること。	思いやりが大切だと思つた。	人に話すこと。
24	またうわさが広がったからかわいそう。(5/6赤)	→	誰かにいいいめをしないようにする。	助ける勇気が必要。	人を助ける。
25	うわさを消したいけど、うわさがこわくて消せられない。(1/2赤)	→	仲間外れや差別は人にしてはいけない。誰にでも優しくしてあげたり、手伝いたい。	人に優しくする気持ち。	人に優しくする、助けることだと思つた。
26	りんさんのことを言ばせたいけど少しこわい。(2/3赤)	→	困っている人がいたら助ける。	優しくして、丁寧にする気持ちが大切。	優しくすること。
27	うわさがもし本当だったらこわいし、一人ぼっちばかりかわいそう。(1/2赤)	→	何があっても差別はしてはいけないと思つた。	助けようとする心、気持ち。思いやり。	
28	うわさを消さないで、りんさんがかわいそうだから。(5/6赤)	→	必ずめはすごいと思つた。	助けようとする勇気が大切。	自分で、相手がどんな気持ちかを考える。
29	うわさを消して、りんさんと仲良くして自分だけでぼんやり。(全赤)	→	困っている人を助けて、優しくあげてあげよう。	勇気をもって声をかけて見送つてあげよう。	いいこと？ こわくても、むすかしくても、困っている人を助ける。
30	うわさを消したいけど、ちょっとだけうわさがこわい。(5/6赤)	→	仲間外れや差別をしたら本当にされて、仲間はずれになるからさういふことはしない。	助けようとする勇気。	一番勇気。
31	うわさは少しこわいけど、うわさを絶対になくしたい。(ほぼ全赤)	→	仲間外れにしたり、差別をしてはいけない。	助けようとする勇気。善い気持ちが大切。	勇気をもって聞くこと。
32	母さんがお医者様はうつりませんと言っていたからうわさを消したい。でもみんなうつると言っていたからちょっとこわい。(ほぼ赤)	→	やっぱ差別は悪いなあと思つた。	優しい気持ちと親切の気持ちが大切。	ちゃんと声をかけられる。
33	うわさがなくなるといいけど、今よりもっと広まるといい。(5/6赤)	→	人には優しくして、みんなと仲良くする。	どんな人でも困っていたら助ける。声をかける。	どんな人にも優しく、困っている人がいたらすぐに助ける。